



よかど！レーザ加工型板で薩摩焼業界に新風

志光窯

下拂 豊志

(鹿児島県薩摩焼協同組合 副理事)

私は、1989年、鹿児島市吉野町に「志光窯」を築窯いたしました。これまで、工業技術センターには、窯業部の時代から陶土や釉薬に関する相談にいつも親身になって対応していただいております。最近ではレーザ加工機を使った薩摩焼用型板の研究で大変お世話になっています。

弊窯では、主に黒薩摩のろくろ製品や板もの(平皿など)製品を製作しております。それらの加飾には布着せ技法といって、陶土の表面に布をかぶせて布の文様を写し取る技法を多用していました。しかし、形状が不安定な布の文様を綺麗に写し取ることは、繊細な作業が必要であり、効率的に作業を行うことが課題となっていました。

2016年の秋、工業技術センターからレーザ加工機を使って浅彫りされた合板を紹介されました。それはまだ試作品でしたが、「これを薩摩焼の加飾に利用できませんか」と提案がありました。

「板もの製品に役立つのでは」と思い、2枚ほど借り受け、試作したところ、布着せ技法より容易に加飾ができ、効率的に作業できるようになりました。

その年の12月に行われた薩摩焼フェスタで試験的に販売したところ、完売する勢いでした。

薩摩焼フェスタで手応えを感じ、この型板を組合内の窯元にも知って欲しい思いから、工業技術センター主導のもと薩摩焼協同組合の有志で「薩摩焼型板研究会」(現在20社加盟)を設立しました。同研究会では、様々な窯元が独自の柄や部分的にマスキングするなどのアレンジを加え、商品を発表しています。中には個展や展示会で販売し、主力商品の1つとして根付いたものもあります。

おかげさまで、私の商品も型板の導入当初から売れ続けており、昨年の鹿児島陶芸展では「押し型文様皿」が入賞するなど評価も上がっています。

現在、コロナ禍で薩摩焼業界も展示会や個展の開催が中止や延期といった苦境に立たされています。このような厳しい現状の中、救いになっているのがレーザ加工型板を活用した新商品です。型板のおかげでなんとか売り上げも維持されております。

今後とも、薩摩焼協同組合員の技術の向上、新商品の開発等ご指導いただければありがたいです。



志光窯外観



鹿児島陶芸展入賞作「押し型文様皿」